

清沢満之門下の「信念」： 清沢没年前後を中心として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 武蔵野大学仏教文化研究所 公開日: 2016-12-14 キーワード: 近代仏教, 浄土真宗, 清沢満之, 暁烏敏, 多田鼎 作成者: 春近, 敬 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/339

清沢満之門下の「信念」

— 清沢没年前後を中心として —

The Usage of "Faith" in the Writings of Kiyozawa Manshi's Disciples: Focusing on the Period Right Before and After Kiyozawa's Death

春 近 敬 (HARUCHIKA Takashi)

〈キーワード〉 近代仏教 浄土真宗 清沢満之 暁烏敏 多田鼎

一 はじめに

本論の目的は、明治後期の仏教者清沢満之（一八六三～一九〇三^①）を表すキーワードとされている「信念」という言葉を、暁烏敏（一八七七～一九五四^②）や多田鼎（一八七五～一九三七^③）ら門弟たちがどのような文脈

で用いていたかを明らかにすることにある。

これまで清沢の思想や信仰、および社会的な活動などについて総合的に論じられる際は、多くは「信念」という言葉によって説明されてきた。寺川俊昭は、近代の仏教者としての清沢の「生涯を貫く根本的な課題はた

だ一つ、「信念の確立」以外にはなかったといつて、誤りではないだろう^①と述べている。

それは、清沢が死去の数日前に自身の「如来を信ずる心の有様」について書き記し、雑誌『精神界』に掲載された「我信念」が周囲に強いインパクトを与えたことによるものであり、残された者の多くが「我信念」を清沢の信仰の集大成と見做したことによる。最も近い門弟であり、清沢亡き後の清沢の最大の宣伝者であった梶鳥敏は、「我信念」を「無意識的に先生が自分の一生の事を、信仰の上にしめ上げて、総和を示されたもの^②」であるとして、「先生の事を聞きたいと言ふ人々の集らるゝ時はいつでもこの書を講ずることにして^③」いた。清沢満之イコール「我信念」という認識が没後まもなく成立していたのであり、現在の清沢理解にも大きな影響を与えているのである^④。

ところが、「信念」とはもとより「信仰ノ念^⑤」「神仏をかたく信じること^⑥」であり、それ自体は取り立てて特殊な用語ではない。晩年の清沢の思想は主に雑誌『精神界』において展開されたが、『精神界』誌上では清沢はあまり積極的には「信念」の語を用いていない。「我信念」(『精神界』三卷六号掲載)の他に「信念」が本文中に主題的に用いられている文章としては「宗教的信念の必須条件」(『精神界』一卷十一号掲載)が挙げられるが、「宗教的信念の必須条件」は文体や主張内容に清沢の他の文章との乖離があり、門弟による執筆の可能性が指摘されている^⑦。一方で、清沢存命中の『精神界』においては清沢以外の数多くの執筆者が文中に「信念」の語を用いており、その意味するところは一致せず、人によって様々である^⑧。

それでは、清沢の周囲にいた門弟たちは、どのような意味で「信念」の語を使っていたのであろうか。本論

では、清沢の死去前後に『精神界』に書かれた記事のうち、清沢門下の「三羽鳥」と呼ばれて晩年の清沢と「浩々洞」と名づけられた共同生活を送り、『精神界』の立ち上げと運営に主体的な役割を果たした暁烏敏と多田鼎、および佐々木月樵（一八七五～一九二六）¹³の執筆記事を中心に検討を行いたい。

二 雑誌『精神界』の「信念」

『精神界』は、東京の清沢のもとで「（清沢）先生を中心としてあまり術語を用ひないで一般人に仏教の真意を伝えるやうな雑誌を拵へてみたい」という暁烏の願いに清沢が応じる形で生まれた雑誌である。清沢満之を後見人とし、庶務及び署名人を暁烏敏、編集を多田鼎、会計を佐々木月樵が務めた。形としては清沢を中心としているが、実際には清沢は編集にはほとんど関与していない。自身の講話をもとに門弟が成文して「清沢満之」名で掲載された文章も少なからず存在するが、基本的にはそれらの校閲もしていなかった。

『精神界』は月刊誌の体裁をとり、一九〇一年一月から一九一九年三月まで発行された。記事欄は〈精神界〉（巻頭言）、〈論説〉、〈講話〉（主に浩々洞での講話の筆記）、〈感興〉（詩歌）、〈解釈〉（仏典解釈）、〈雑纂〉（エッセイなど）、〈社会〉（時事への短評や新刊紹介）、〈報道〉（浩々洞および各地の動静や告知、読者からの手紙など）、〈小観〉（その他の短文）などから構成されている。

清沢が死去したのは一九〇三年六月で、このとき『精神界』は創刊から二年六ヶ月を迎えており、三巻六号が発行されている。そこで、創刊から死去までの月数と同期間を死後にとることで、清沢の死を境に「信念」という言葉の使用頻度とその用法がどのように変化したのかを調べたい。すなわち、創刊号（一九〇一年一月

十五日発行) から三巻六号(一九〇三年六月十五日発行) まで、およびその後の三巻七号(同年七月十五日発行) から五巻十二号(一九〇五年二月十五日発行) まで、清沢の死去の前後三十ヶ月を本論における調査範囲とする。この範囲において「信念」の語が登場する記事を調査し、その中で暁烏、多田、佐々木の執筆した記事について、用法およびその変遷について検討する。巻頭言である「精神界」欄はすべて無署名であり、他にも「社会」「報道」欄を中心に執筆者を特定できない記事も存在する。しかし、まずは門弟たちが自らの名を出して発信した文章を検討材料としていきたい。

清沢の死去前後三十ヶ月の『精神界』において、「信念」の語が現れる記事の本数は以下の通りである。

記事全体……(没前) 五十九本 / (没後) 八十九本

暁烏署名……(没前) 三本 / (没後) 十一本

多田署名……(没前) 十二本 / (没後) 十四本

佐々木署名……(没前) 二本 / (没後) 一本

※書名としての「我信念」など固有名詞は除外した。

記事の全体数としては、没前三十ヶ月が五十九本に対して没後三十ヶ月が八十九本と増加している。そのなかで暁烏が三本から十一本と大幅に増加した一方で、多田は十二本から十六本と、清沢の存命中から積極的に「信念」の語を用いている。逆に佐々木は二本から一本と、一貫してほとんど使用していない。

次項より、三人の「信念」の用法の傾向を見ていきたい。

三 「信念」の傾向——暁鳥敏の場合

暁鳥は清沢存命中も「信念」の語を全く使わなかったわけではないが、その数は暁鳥自身が執筆した全体の記事数からすれば非常に少ない。存命中の記事には次のような使用例が見られる。

帝王我に鑑みて、汝の、信念を¹⁴変ぜよ、然らずんば汝を殺さんと云ふ共、我は平然たらんのみ、我は敢て云はん。我は我の信念は生くるもの也、我に我が信念を棄てよと云ふは、我に永久の死に入れと命する也。¹⁴（「獅子奮迅三昧」二卷十二号〈雑纂〉欄）

「我は大法の為めに身を捧げんとす」「我は大法の宣伝者なり」と、勇ましく自らの信仰を表明する記事である。暁鳥は清沢の存命中から、しばしばこのように弥陀の信仰について自他を鼓舞するような姿勢をとっていた。

清沢の没後は、記事への登場が大幅に増加する。まず、〈解釈〉欄に連載していた『「歎異鈔」を読む』¹⁵において、「信念」の語が現れる。

故に、以下三行ばかりの文章（筆者註…「親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり」の文）には尤も明白に親鸞聖人が自己の信念を¹⁶表白せられたのである。（『「歎異鈔」を読む（其十）」三卷十二号〈解釈〉欄）

茲には親鸞聖人自ら、弥陀の本願がまことならば釈尊の説教も虚言ではない、釈尊の説教が虚言でなくば、善導の御釈も虚言ではない、善導の御釈がまことならば法然聖人の教へも虚言ではない、法然聖人の教へが虚言でなかつたなら、この親鸞たとひ愚也と云へ共、其の信念の表白は決して虚言ではない。若夫我が信念が虚言ならば弥陀の本願が虚言であるのである。我は弥陀の本願其儘に信ずる者である、本願の化現である。我信念の根底は昨日や今日に作つたのではなくて、十劫の苦より弥陀の本願の上に成就したるもの也と大々の自覚を表白せられたのが此一段である。(18) (『歎異鈔』を讀む) 四卷八号〈解釈〉欄)

このように、親鸞の念仏の教えに対する信心を「信念」と言い表している。次に挙げるのは、法然が親鸞に語つた信心を「自己信念の実験」と表現している箇所である。

法然聖人に対する親鸞聖人が全心を傾け法然聖人の上に絶待(つゞ)を認めて信に入られしこと、又親鸞聖人に対して法然聖人が飾る所もなく自己信念の実験を直白せられたことは、信仰道程に進みつゝある私のためには大なる指導である。(19) (『歎異鈔』を讀む (其十二) 四卷七号〈解釈〉欄)

「実験」とは実際に経験したところという意味で、清沢がしばしば用いていた言葉である。とくに「我信念」に書かれた「……信念の幸福は、私の現世に於ける最大幸福である。此は私が毎日毎夜に実験しつゝある所の幸福である。来世の幸福のことは、私は、まだ実験しないことであるから、此処に陳ることは出来ぬ」⁽²⁰⁾ という一文は、暁烏らによつてたびたび言及されている。

私は十年ほど已前に、某信者が、本願は疑ひませぬが、さて只今死ぬと思ふと、行先に紙をはつたやうであるとの懺悔をきいて、この人の信念を疑ひました。所が十年後の私がこの人と同じ懺悔せねばなりませぬ。浄土往生に就て毫厘の疑惑のない事もまことである。さりとして又死ぬ事が心地よくないと云ふのもまことである。⁽²⁾〔『歎異鈔』を読む〕五卷十二号〈解釈〉欄)

この文章は『歎異抄』第九条について述べた文章であるが、ここでは暁鳥が出会った「某信者」の念仏の信心という意味で用いられている。

次の三点の文章は、いずれも清沢を追憶し、顕彰する記事である。

肉的先考のおはさゞりせば、いかでか我がこの肉身あらんや。靈的先考のおはすなくんば、いかでか我が今日の靈的信念あらんや。我が肉身も先考の賜也、我が信念も先考の賜也。⁽²⁾〔感謝第二〕五卷二号〈雑纂〉欄)

されば我れ今日爾（筆者註…如来）の御導きによりてや、安住の地を得たりと雖、信念実に薄く、行業実におろそか也。⁽²⁾〔感謝第三〕五卷三号〈雑纂〉欄)

凡夫の心の総て狂へる中に狂はぬにて他力の信念の妙を知るべし。其が身心の健なりし時に修養と信念に就て指導を給ひし御身は、身心衰えたる時に際しても高遠なる信仰上の教訓を与へ給ひぬ。⁽²⁾〔感謝第六〕五卷七号〈雑纂〉欄)

「肉的先考」すなわち実の父親と「靈的先考」たる清沢を並べて、清沢によって「靈的信念」「他力の信念」を得ることができたことを感謝する内容となっている。

「人生の煩累」に苛まれた清沢にとつて、自己の確立によって安心を得ることは大きな課題であった。しかし、清沢は死の直前に至るまで「信念」を獲得し、心に平穩を得たという表明をしていない。また、清沢は親鸞に依拠して思想を立てていたが、それを安易に真宗の用語に結びつけて語ることにはきわめて慎重であった。それが「我信念」では「私は無限大悲の如来を信ずることにより、今日の安樂と平穩を得て居ることであります⁽²⁶⁾」と語られているのであるが、これは実に死の一週間前の吐露である。この告白を清沢の思想の「総和」として受け止めた暁鳥は、清沢の生涯の結論（と暁鳥が見做したもの）を引き継ぐ形で、自らが既に「信念」を得たかのように振る舞うのである。

此に於て、宗教の信念には単に芸術のやうに恍惚たる境界のみではなく、確かに救はれたりと云ふ自覚があるのである。⁽²⁶⁾（「科学、芸術、宗教」四卷二号〈講話〉欄）

このように、「宗教の信念」には確かに救われたという自覚があるものなのだ、と「信念」の有り様について断言している。

清沢没後の『精神界』には読者からの相談に答える内容の記事があるが、それでも「信念」を獲得した立場から未だその段階に到らない者に対して説き聞かせるかのような姿勢が窺える。

貴君は阿弥陀様が客観だの、主観だの、……とか六ヶしいことをしらべて入らっしゃいますが、私共は一

向そんな事は私共の信念の問題とはなりません。そりや私共も或時期の内は、そんな六ヶしい疑問に罹つて苦しんだ事もあります。然しそんな事は到底私共の有限の知識では判定する事ができぬのであります。……何分信念は大切なことですからまじめになつて、自分の煩ふて居る点を験べ、救はれたいの思ひを験べて見、如来の德音をきく事にせられよ。又称名は随分せらるゝがよろしかろふと思ひます。⁽²⁷⁾（如来は信仰の上に在り）四卷一号（講話）欄）

周知のとおり、暁鳥は後のいわゆる「戦時教学」に繋がる言説を比較的早い段階から展開していた。次の文章は、自分が入營することとなつて母親が悲しんでいるという読者に答えているものである。

君にして若し動かすべからざる安住を得て、兵營に入ること食堂に入るかの如くであつたら母君の精神はいつのまにか、君かこの精神に感化せられて落付かるゝやうになられるのはあたりまへではあるまいか。……君は大に反省せねばならぬ。母君の苦悶はともかく、君自身の信念に大に弱い所があるではないか。⁽²⁸⁾（徴兵に就き家事に苦悶する人に与ふる書）五卷五号（講話）欄）

社会の現状追認や戦争肯定といった問題とはまた別に、相談者に対して苦悩の原因を「信念に大に弱い所がある」からだとして断じる姿を見て取ることができる。

以上の検討により、この時期の暁鳥の「信念」については以下のこと可言えよう。暁鳥は、自らの名で著した記事においては、清沢の存命中には「信念」の語をあまり用いていなかった。しかし、清沢の没後は積極的に「信念」という言葉をもつて語るようになった。その「信念」とは心に平穩を得るために獲得すべき境地で

あり、それは清沢の「我信念」を強く意識したものであった。しかしその内実は清沢以上に直接的に真宗の信仰と結びつけた理解であり、しかもこの頃の暁鳥は自らがあたかも「信念」を獲得したかのような立場から、他者に対して「信念」を獲得するように説いていたのであった。

四 「信念」の傾向——多田鼎の場合

「信念」の語を清沢没後に多用するようになった暁鳥と異なり、多田は『精神界』初期の主要執筆陣ではほとんど唯一、清沢存命中から自らの記事に継続して用いている。そしてその理解は、清沢の死去の前後で変わっていない。

信念は唯一なり。人によりて異なるものに非ず。是れ親鸞聖人の見解なり。……師法然聖人の信念も、弟子親鸞聖人の信念も全く一なり。釈迦如来の信念も、濁悪凡夫の信念も全く一なり。三千年前の信念も、三千年後の信念も亦全く一なり。人生に於ける他の事物は、凡て変らむ。されど此信念のみは変るものには非ず。人生の知識は動かむ、感情は移らむ、意識へ変ぜむ。社会の要求は転ぜむ。されど此宗教上の信念のみは、とこしへに、とこしへに変動することあらざるなり。⁽²⁹⁾（『歎異抄』の一節「一卷三号〈解釈〉欄」）

これは『歎異抄』後序の「如来よりたまわりたる信心」について論じた文章である。「信心」の言い換えとして「信念」の語を用いていることが窺える。

暁烏の『歎異鈔』を読む」と並行して、多田は〈解釈〉欄で「正信偈註」⁽³⁰⁾を連載しており、その中でも「信念」の語は多用されている。中には天親の「麗はしい信念」と教理との花の香」⁽³¹⁾（「正信偈註（一六）」三卷四号〈解釈〉欄）という表現や、道綽の「盛に弘められた其信念は、当時多数の学者などの同意せぬ所であつた。」⁽³²⁾（「正信偈註」三卷十号〈解釈〉欄）など、単に「信心」や「信仰」を言い換えたと思われる箇所もある。しかし多田の場合、「如来からたまわりたる信心」ということに強い関心が注がれ、「信念」の語もその文脈で多く用いられている。

私共の信念は、たとひいかほど小やかに見えても、これ如来の御名そのもの、顕現である、如来の大願そのもの、顕現である。（「正信偈註（五）」二卷五号〈解釈〉欄）

私共が我信念を透して、唯一の如来を見たてまつる時、其仏心が常に唯一の慈悲として我心に映らせたまふ時、その信心は真のものである、もし左なくして、其御心が慈悲である如く、又無い如く、色々に混雜して映るならば、その信心は真のものでない、自分細工のものである。自分細工のものには、生命がない生命は生ぜられた者にある。それ故、生命ある真の信念はつくつたものでない、細工したものでない、生ぜられたものであり、与へられたものでなければならぬ。私共は（筆者註…源信）僧都の指導によつて、此真の信念をいたゞいて、此信念より響き来る御名の御声に励まされて、今後の生活を進め行かねばならぬ。⁽³⁴⁾（「正信偈註」四卷一号〈解釈〉欄）

信心、すなわち「信念」は「自分細工のもの」でなく、「生ぜられたものであり、与へられたもの」でなく

ればならないと述べている。

そして、その「信念」は『歎異抄』で説かれるように一つの信心であることを強調する。「正信偈」冒頭の「帰命無量寿如来」の文について、「正に聖人の自身の信念を打出したたまふたものである」とし、これは「私の信念の手本」であり、「共に携へて速にこの手本と同じ信念に済むやうに致したいと思ふ。」（「正信偈註（二）」二卷二号）と述べている。また、釈迦と龍樹の間に時代と地域の隔りがあることについて、「同じ信念の妙致」⁽³⁶⁾（「正信偈註（一四）」三卷二号）と言いついて表している。

初めに災難と想つた事も、後には、幸が含まれてあつたのを知りました。これから、又いかなる大なる苦痛が、生じ来るか、知れませぬ。……然し一家同じ信念の上に、互いに手を取つて、光明の中に、生死を共にすることは、如来が、屹度なさしめたまふ所と確信して居ります。⁽³⁷⁾（「一同胞に下れる光」四卷九号

〈雑纂〉欄

信念が個人の上にあらはるゝ、其模様の同じからぬをいふは善し。されど其極、有害の信念其者も又個々別々なりといふことなけれ。道は一なり、如来は一なり、其仰心は一なり。一を享けたる我等の信念は、常に同一なるべき也。⁽³⁸⁾（「染香小観」五卷三号〈雑纂〉欄）

〈解釈〉 以外でもこの傾向は一致しており、「同じ信念」ということが多田にとって重要であつたことが窺える。

この時期の多田の思想はいわゆる恩寵主義と呼ぶべきものであり、ふさぎ込まずに阿弥陀如来の慈悲をその身に受けて仰ぎ見ることこそが肝要であると主張していた。

私共は、唯本質の御慈悲一つをたのまねばなりません。若し之をまちがへて、御慈悲を見ずして、我内心の心ばへをあてにしてをるならば、私共は決して真実に安ずることはできません。……されば其安心や、真実のものではなくて、若存若亡のものである。一見、立派な信念のやうに見えて、実は「これでこそ」を表とし、「これでは」を裏として、現れてをる一驕慢の悪魔に過ぎぬ。……信念の極致は俯くのではない、仰ぐのである。(「向上の一関」五卷三号〈講話〉欄)

現在の自分さへ分らぬ、死んだ後のこと分るものではない。現在も暗黒であれば、一寸さきは猶更暗黒である。……然るに私共は喜ばねばならぬ。私共の了見では、さつぱり分らぬ此問題が、仏智の御力によつて、全く解決さるゝのである。科学、哲学、宗教学、一切の自分の分別によつては、どうしても開くことのできぬ此暗黒の鉄門が、他力回向の一信念の鍵によつて、たやすく開くことができるのである。(「浄土往生の信仰成立」五卷八号〈講話〉欄)

多田において、「信念」は「道」という概念においても表される。極悪深重の凡夫たる我が身を抱えながら、それを照らす弥陀の慈悲の光に照らされて日々を歩んでいくことを道に譬えているのである。それを歩ましめる心境は「大道の信念の上より湧いて参る」(「恭敬心の開展」五卷七号〈講話〉欄) であり、慈悲の光に入ること「新たな信念の生命を得、大行の力をいたゞいて」(「正信偈註」三卷九号〈解釈〉欄) いくのだとしている。

貪愛と瞋憎との二河、われを犯し来りて、われを殺し尽さむとするとき、われに一条の血路を開かしむる

は、是れ何者ぞや。曰く是れ我信念の道なり。……此清浄なる信念の道は、汚穢なる我一切の妄情を払ひ去りて、而して後に初めて獲來るべきものにあらず。……我は我汚穢なる妄情の中に在りて、而も此清浄の信念を享得するなり。視よ、清らかなる白蓮の花は、穢れたる淤泥の中にさかゆるを。⁽⁴³⁾（二河の中間に於ける白道」一卷九号〈解釈〉欄）

只私共の当に享くべき所得として與へられたる現前一念の大信に安んじて、此信念の現はし出す微妙の風光をたのしみながら進まうではありませぬか。⁽⁴⁴⁾（「忘卻來時道」三卷七号〈講話〉欄）

多田の「信念」の用法には、暁鳥のように「我信念」を意識した形跡が見られない。多田は清沢の存命中から一貫して真宗の「信心」の語の言い換えとして用いていた。また、学理を超えたところで弥陀の信仰に帰することで安心を得るといふ点においては暁鳥と共通するものの、暁鳥が「信念」を「獲得する」ものと捉えているのに対して、多田はあくまで「如来よりたまわりたる」ものであることに重点を置き続けたのである。

五 「信念」の傾向——佐々木月樵の場合

佐々木においては、清沢死去の前後三十ヶ月の範囲内で「信念」の語が現れる記事は三本のみであり、全体的にほとんど用いていない。

「源信和尚の『往生要集』、及びダンテの『神曲』」（第二卷第五号〈講話〉欄）において、『往生要集』の描

写が源信の「心靈的經驗の發現」であり、「僧都が信念の投影」であり「僧都の宗教的信念を標榜したり厭穢欣淨の下より流出し」⁽⁴⁵⁾ているものと述べている。

「親子論」(三卷三号〈論説〉欄)では、「ルカによる福音書」に描かれた放蕩息子と父親について、如来と自分たちの關係に譬えて「宗教的信念の極致」⁽⁴⁶⁾であると論じている。

「釈尊の成道と親鸞聖人の入室」(四卷十二号〈論説〉欄)は釈迦の法身や報身といった常住の仏身は、遺弟たちの応身の釈迦に対する敬慕の情から生まれたものだとする説に反駁する内容の文章である。

若し夫れ、釈尊の遺弟にして、色身生滅の仏陀の上に宗教的信念を確立する能はず、常住仏身の上に初めて我宗教心の要求を満足したりとせば、釈尊菩提樹下の正覚、豈また然らざらんや。⁽⁴⁷⁾

ここでは、そのような敬慕の念によらなければ「宗教的信念を確立」できず「宗教心の要求を満足」できないのであれば、菩提樹の下で釈尊が得た正覚も成り立たないではないか、としている。いずれも、「信念」の語を信仰の意味で用いており、清沢はもとより真宗的な意味合いも希薄である。

六 おわりに

『精神界』が創刊された当初は多くの執筆者が記事に「信念」の語を使っていたが、その用法は様々であり一致していなかった。創刊二年目の一九〇二年前半期に浩々洞で「信念」の語が流行したとみられるが、それ

でも特定の意味を持った形で定着することはなかった。⁽⁴⁸⁾ 清沢の死去を契機に、暁鳥は彼自身の問題関心に基づいて清沢の「我信念」に意味を見出していった。一方で多田は、清沢の存命中から真宗の信心に引きつけて言葉捉えていた。暁鳥はその後、清沢が「信念」という語を選んだこと自体にも積極的な意味を付与していった。後年の彼は「信念」「信仰」「信心」は似ているが「味はひの違ひ」⁽⁴⁹⁾がある⁽⁵⁰⁾と述べ、「信念の念には信樂の樂、ねがふといふ意味がある。それが念仏の念である。念仏成仏に仏教の中心がある」と語っている。しかしそれはあくまで暁鳥の理解であり、清沢の思想とは分けて考える必要がある。

このような「信念」の理解の差が何故生まれたのか、そして何故佐々木が「信念」の語を用いるのに消極的であったのかをただちに断ずることは困難である。しかし、暁鳥と多田は非常に強い伝道意欲に突き動かされて布教活動を行っていたのに対して、佐々木はそのような二人の姿勢にしばしば批判的であったことと無関係ではないだろう。多田が「先生は化他の道に急いではならぬと、度々、戒められました⁽⁵¹⁾。けれども私は其を守ることができずに、既に既に其前から、一伝道者を以て、自ら任じて居りました」(願わくば我が昨非を語らしめよ)十四卷第十一号)と述懐したように、生前の清沢自身も門弟の説教者的態度に否定的であったのだが、当時の暁鳥と多田は明らかに「信念」の語をもって伝道に邁進していたのである。

『精神界』は、手垢のついた仏教用語を用いずに仏教を語ることをコンセプトとした雑誌であった。その意味において、「信念」という言葉は仏教用語を用いずに伝道を行うことのできる恰好の道具であり、「一伝道者」を自認する彼らが、その道具に各々自分なりの意味を読み込んでいったのではないかと考えられるのである。

註

- (1) 哲学者、大谷派僧侶。東本願寺育英教校、帝国大学文学部哲学科を経て一八八八年京都府尋常中学校長。一八九〇年禁欲生活に入る。一八九四年結核に罹患。一八九六年大谷派の宗門改革運動を起こし、除名処分。一八九九年新法主大谷光演の教育係として東京に移住。このとき門弟たちと「浩々洞」と呼ばれる共同生活を開始。一九〇一年雑誌『精神界』発行。同年東京に開校した真宗大学（現大谷大学）初代学監。一九〇二年に息子と妻を相次いで亡くし、翌一九〇三年愛知県大浜（現碧南市）西方寺にて死去。
- (2) 大谷派僧侶。清沢門下で、清沢の教えを世に伝えるべく積極的に活動。一九二二年「凋落」し、浩々洞を離れる。以後石川泉松任（現白山市）の自坊を中心に活動。一九五一年大谷派宗務総長。
- (3) 大谷派僧侶。はじめ暁烏らと共に清沢門下で「精神主義」の活動に従事。一九一四年信仰に「動転」をきたし精神主義から離れ、伝統的な教権主義に回帰。以後は愛知県蒲郡の自坊にて活動。一九二四年東本願寺伝道講究院長。清沢の思想を受け継いだ金子大栄が異安心に問われた際には宗門側に立った。
- (4) 寺川俊昭『清沢満之論』文栄堂、二〇〇二年、一三三頁。
- (5) 暁烏敏「清沢先生の信仰（『我信念』講話）」（福島寛隆、赤松徹真編『資料清沢満之（講演篇）』同朋舎、一九九一年）二頁。
- (6) 同上。
- (7) 岩波書店版の『清沢満之全集』では、清沢の日記を収録した第八巻は「信念の歩み」、書簡を収録した第九巻は「信念の交流」という表題が附されている。
- (8) 大槻文彦『大言海』富山房、一九三三年。
- (9) 『日本国語大辞典 第二版』小学館、二〇一一年。
- (10) 『精神界』掲載の「清沢満之」名義の文章の相当数が門弟によって意図的に編集され、あるいは全く新たに成文されている問題については山本伸裕「精神主義は誰の思想か」法蔵館、二〇一一年に詳しい。
- (11) 詳細は拙稿「初期『精神界』における清沢門下の「信念」（『現代と親鸞』第二六号、二〇一三年）参照。
- (12) 大谷派僧侶。清沢門下で仏教学を専攻する。京都に再移転した真宗大学の整備につとめ、第三代学長に就任。
- (13) 暁烏敏「浩々洞時代の清沢先生」（『清沢満之』観照社、一九二八）一八二～一八四頁。

- (14) 『精神界』二卷十二号、一九〇二年、四五頁。傍線は筆者による。原文の濁点の欠落は適宜補った。以下同じ。
- (15) 同上
- (16) 後に既鳥の主著となる『歎異抄講話』は本連載を再構成したものである。
- (17) 『精神界』三卷十二号、一九〇三年、三九頁。
- (18) 『精神界』四卷八号、一九〇四年、二三頁。
- (19) 『精神界』四卷七号、一九〇四年、二九〜三〇頁。
- (20) 『清沢満之全集』第六卷、岩波書店、二〇〇三年、一六三頁。
- (21) 『精神界』五卷十二号、一九〇五年、二六頁。
- (22) 『精神界』五卷二号、一九〇五年、四三頁。
- (23) 『精神界』五卷三号、一九〇五年、四二頁。
- (24) 『精神界』五卷七号、一九〇五年、三九頁。
- (25) 『清沢満之全集』第六卷、岩波書店、二〇〇三年、一六四頁。
- (26) 『精神界』四卷三号、一九〇四年、二三頁。
- (27) 『精神界』四卷一号、一九〇四年、二二〜二三頁。
- (28) 『精神界』五卷五号、一九〇五年、二四頁。
- (29) 『精神界』一卷三号、一九〇一年、二四頁。
- (30) この連載は後に纏められ、『正信偈講話』として出版された。
- (31) 『精神界』三卷三号、一九〇三年、三九頁。
- (32) 『精神界』三卷十号、一九〇三年、三三頁。
- (33) 『精神界』二卷五号、一九〇二年、二四頁。
- (34) 『精神界』四卷一号、一九〇四年、二九頁。
- (35) 『精神界』二卷二号、一九〇二年、二二頁。
- (36) 『精神界』三卷二号、一九〇三年、三六頁。
- (37) 『精神界』四卷九号、一九〇四年、三五頁。

- (38) 『精神界』 五卷三号、一九〇五年、三六頁。
- (39) 『精神界』 五卷三号、一九〇五年、二七～二八頁。
- (40) 『精神界』 五卷八号、一九〇五年、一九頁。
- (41) 『精神界』 五卷七号、一九〇五年、二〇頁。
- (42) 『精神界』 三卷九号、一九〇三年、二六頁。
- (43) 『精神界』 一卷九号、一九〇一年、一九頁。
- (44) 『精神界』 三卷七号、一九〇三年、二二頁。
- (45) 『精神界』 二卷五号、一九〇二年、三三頁。
- (46) 『精神界』 三卷三号、一九〇三年、一六頁。
- (47) 『精神界』 四卷十二号、一九〇四年、一四頁。
- (48) 浩々洞では「精神講話」(一九〇二年五月からは「日曜講話」と題される講話が行われていた。(報道)欄の「東京だより」にはその開催報告が載っているが、ある一時期に集中して「信念」という語が講題に用いられた形跡がある。一九〇二年一月二十六日に多田が「信念の相状」を、二月二日に楠龍造が「信念の転進」を述べ、さらに和田鼎が「一神仙譚」につき、宗教的信念と智識との価値について談ぜられ候」(第二卷第二号四八頁)とある。三月九日には佐々木が「弘法大師の信念」、五月一日に楠が「常識と他力の信念」、六月二十二日に暁鳥が「我が現在の信念」、同二十九日に佐々木が「信念の超絶性」、九月一日に近角常観が「信念上の経歴」を講じている。
- (49) 暁鳥敏「清沢先生の信念」『暁鳥敏全集 第一九卷』涼風学舎、一九七七年、五九二頁。
- (50) 同五九四頁。
- (51) 『精神界』 十四卷十一号、一九一四年、三三三頁。

(武蔵野大学仏教文化研究所研究員)